桂園遺文　上

和書門
類
二六〇一六號
六九函
三架
二冊

内閣文庫
159
和書
類
二六〇一六號
二〇四函
二冊
一〇架

内閣文庫
番號 和 26016
冊數 2（1）
函號 204 159

204-159

欽夫天地のあらつのくたちなく
あらとつちのふるえのころんやさし甚
源戎あまた道こそあ横さ成りしあそれ行
人出かくれいきうれあ屋中まとかの子里れ
まさあおかくめ批たいうちと本理ぞうさるの
さのを無画てこしもつきたまり末れ世志
まうりまふこのくるみとら無人様のみ
上れ清くさ哉か画つきて字とかふ画し
こゝふ針木光為めし　いさは画あるとうらし

日本政府図書
浅草文庫

哥よむことを好むこと常なりとて拾ふ
あまたくゝ濁世とよりいにしへの道の
いとよく深くなふ嘉永年なかまて香川
景樹翁の時に浅けれど道残し一子に
さゝやきさんとそのいはへるしれ久しきこともを
かきこれしあり見えて二巻となし世に
広く倍くんとして此書俗言なとまして
いのふたや学ゆるもひの道ともさとるも遊す
かく世にとて残む残ると志てく一盃たまうるもし

哥さるんへ人なるへく味ひてたまはりに
こゝまて拾すてのもほまと神学の為に猛
さあ拝一斎せし一盃まる色我をもち和歌
ともたるまゝかしとてこのくとれ勢らまに
まふ舞

安政六年十月　清水謙光識

桂園遺文序

志きしまの大和ことの葉は千早振
神の御代より傳はりてしもかくあまねく
おほかたのことのはの事なさけりて後の世に
いにしへよりかはの木のはやかましくになく
うたよみてそれぞれおほくにみなの
ことわりをしらぬ者ぞ桂園の翁こそ其道
をばよくしりていひしことのはのこりて猶

てふことをなしみてまる所申にいてゝはさら
ましら給ひて哀とおぼしめしけるにあはれ
して婦人のむすめなり　言継しるすみとの
酒の心みしきはこの世にて拙く何事計る拙の
手しを我らしたる人みな口ゝによりてすの者
投の終おしならにもし挿せ小さき紙ゝ文と
出むる日まかやうれよしこゝろにたゝ命とも庭也
弁に常安利く所かくて私のふに人いつり

あの紙を給ひて山田みに若菜のひたすらに補
てふこと我むし紙を此ら給にむら紙とみとよ庭
むかし久しきみれ月の桂いおりけんすまゝ心にて給よ
其比ん年にむ心をみ庭ひあ所志て世にもと
狂言所へ行むやうこと私の不志ゝ己つうらすり給
ゐ所志て世のとみ弁りて世に紙給くかすりあむ
にをこかのきせ苺のやにはむかすとのよ給まいそとちら
出やいと新にたよりあ所文ともみ志給ての出うる

けるとのせくかいし侍之家の集を一つに綴りて
書あつめてしけれはとおほし桂園
遺文となつけて世にもてはやさるゝ
板にゑりて世にひろめまほしけれはなむ
とかく申す安政むとせといふ年文月
十まりの日に 穂積忠尚しるし侍り

桂園遺文上

文化七年の日記のうち正月の所より

三日夕ぐれつかたいさゝかすゝろなるに雉子を
抱きて堀河よりまかり出て小さきのつ銭にうり侍り
翁のむかし作りたまひし柏木の山にいほりの
ほとりに停まりてみるかけもなく夕ぐれにかへりて
秋かくのはくまぬ梅のかほり雲にうつろひて
うつくのたゝむかしの句ひ出て春の菊をめてし
ても思ひ家ふかしてをかしけれは
をの乳もてちゝはゝの心もをかしと思

古人の云ゆゑなり歌ハ人の魂のすへてことを淡せずて又
新しくかき利由しきこの外幻のきてちり我すなはち名付
歌無ぬかまぬ源𦾔をも忘ぬをも我らハしかも歌ハ狂げ
稚らんぬきて華の色に似るきといひたまひて其の
まことの歌へいまや此の中ハ心に分家一の都しいにけり
てぬしつか心いかの家なりと云んハもとぎれ殺すて古の心
名無ハ家をやといふ思ひつきいまたか心得らけ給ひ書ハ文
いもく我もの世にあらむ古今集の序に丁え新まの
てこらの外は在でといひ出きを深まりと歌ハ人古のく分
よむてきをいたるなりかに古の後ちに交えと以鬼ハ
出らかきかのらん西此ハ蹄文なきまり出でて其ハ今の

入相し後のことに聞ゆれハなりおの秋はえて
無つく志の事しかハ法ねんにもなりやとかしなのて
に鄭のこのうちによりか居さ調りの出れゆ法ゆまに
うちなむきたるもりんておの主要とをかりゆて
みえたる時の歌しとかくやはすのくゑみとりさそ
いとまは家出ゆ家しといふまはかまうて古にある
この歌とせきといふにゆし以前ちきかのあるまゆしに
はての此るなりたもちに時の家と以まくえまて
と時申してお従えてなりし此志の此ワきをまれ
なり城とつとし此志すま月まもにゆ此て家
とゆゑまといひ来のかたゆむといひ百人一

そもそも歌六人の古今集よりこのかた序にて知りぬへしおよそ言
なりやの歌のうたまとも尤よりはおもしろき事ハとかく
其道の発く人の心も今よりかゝこと生し此文章へ出を
こゝて評しけ事を争ふおのおの其心をのへ言葉ま
より利て法度したるなりてん脈法度ありさてのへりて其
にうたふ其言葉を寄託よりむしろ何にまつ風流之
古今集のしかて法をよくしに此ひ出るをさかしにかはる
歌るハ心に学けれの古人猶夜ハまゐまりて法
に歌れ我なり沢夕くれのちりまにに蝶の子を折ふ
其歌とはまたちの花てとってに蝶の如りやせら色ぞ
ハ風の香の吹をし之ハ百夏のまたなく森りしを

今よりも歌の心をもちてはやこゝにおのおのの身を知れハ
これまでのことさへも我等はさるはまことの法雅の
上の心をもちて此学を能くなして此道に入人ちまとひ
ともに是は法にあるむなしと我もおのおのはなの夕
雲の花まへにつきてもさしかくれにし けはある
やまとは世の人に何やかやしきを心まことの花のあかりもしらん
こゝろも清きハやまこゝろ言葉人の心を出ちまとゝさし
きてこる法心のことも書出れこのかたに嘆りてもなまつ
せんかたなくしてきりの歌に

法性寺氷月か詠草の奥に

人と生まれて言語をなさゝるハあさましきことなれハ言語何り

て俳席を離れて行てもはや是ハ俳言の沙汰なり、
いまだ俳の場ハや俳諧を作れバたゞ其ことを以無ハたま
此人意味て人々もとしたり御座し其ハ俳
言を作の外におもふハ誤りなり此ハ物語の人に等
ろ俳の事なりおもひみしまたそれし是又俳なりし
俳言とやつの門言ひもとしられハ也有る事俳言
の事しても其れ無きハ格の事をも無て人の事と
誠無つくとられハ其うり為にる人にある誠無つ
無ハ俳言を以てなしたるすち調の事にあり斗
庸の事もし俳句ある俳てあるをも無に無志
つれ法なるも其ことくなる此調子の事なるも縁

う称するにしれ何に作ることの事ハもなき事なし志らく
きゆゝ新ハ自然也に無もく作なり自然すなハち
誠実のこと自然のゝ人に出すことの外に何ともいきかもや
これしてよに誠法する作ハ自然なり是を風と云ふ
志きてそ気ありてある為かの趣の大方其ものまことひ
かりきも雲て何ともしきてそれ作り文体大概
の何ことも新く出るあてもしいことを以て席をとりあぐ
何とし作何と詞の事をも撰まんとす何その事あらし
て其と撰まんる事妙調あるその志る縁その為なり
この事もいふ心を也しかるむ志しの事無し言まなる
井ハらまもひ作してハし書き作り元祖

艶本ハ公英か為にかける序文

欲ハ実情をのぶるの序のミ淫欲よりおこり実情の外
なし恋や実ならぬものや世上の事にて古今の深き事に見
哉といへどもさて恵みをしへ偶合になりにけり古を見
むかしをすれて夫婦となりてより男女相ならに移りいひ
て婿をとりもてしあらば序ハ南御やみあるとにて又人
あらしけるか夫婦の間より恵み情ある序
てあらく夜に其の晩に不あなるかもつねのことにてを
後世にも月ら世に思ひ親かなる事をたなるんやハ
この郡県の無きて世の中おかしき孫をうまひに似て
星時勢をしりてき序恵情をまひなかなる無し

今夫婦といふ色ハ恋欲をしも夫わらひ為何のといふま
うき恵情おもふ序へさこ中にて序を紙につきて的や給へる
き序あらそふに依て古くをもかへりて表を晩に
おゆるもをハみなれ邪婬とありてもれハ淫欲なりとき
たまれるあまなるるとのあらかは古をもいへ仮り
はてみゆる前にまことたるとの為にあらそすりの世ハ
つくりて中にミき我他とかくるへかくにもすう
無し此ハ恵ハ歌詠にとをあり実情さら紀にあり
時を情と古今たこの無る七古ちえ知るへし深ふ哉
人情のそ序無きなく紙ハ邪婬の為序中すひ往く
かの文よ以もし序し足持を他り出する夢のことかな

するも詩世にてかざりをも絶せしむる事おのつから
いたれ新なる事も是れは恵なるをよみて恵情のあらわ
れなれば恵ての情より恵なる以て詩なる事も是れは戒
なりとする情に安りて古に行く次なるかしこ一首
文質なれたかひ行なる残して事にて詩論は為すさる品なる
見てなるとも人の詩のことをいふなるものに世余すなる時是
咲安れ業は恵なるはえたるぬなりえたる詩もそれはかれ
出来ぬれ又好事は出なれたる事にも法家説は占なる為さ
に安りは古わくもの恵なる行詩て形しえたり
世情なる紙はなり文解さるは家にやし何か為さ
をつくるも何を恵なるを作すむかのいて立てやつる

うれしきの詩経といふものは唐土の書にて其みちの
事無しや我が朝にもかくて文会などいふものなきにて
是行きぬといひの東にて世に舞をたてゝ無わらきを
しあひなさたゆきしはかりしに行ひてのちやうよう
従んをおしすゝめしは何ぞ前み見をいそ
むね見もよくしえと紀事をぬはしらくの古へ縁にし
さなり文鑑の字をいのてやうもすとむとなん
にひとり行てる男も夜のめ月行かれてぞ恵の目に
似る紀は其字を急に来てるもむかりとはいへ為に
いきてやる残は月の行をも傍やと再ひまそいて
公をむ書かされはかりといひてやう大将一のなり利

妻なき人なといふて夜の目も寝るやうと咲女業も
なき人ハ耳の娩曲なる恋ぬるしらむともかハ見兒に
くよ悲へたまふをもしのてやゆかむやハせ傍其残
推て恋ぬるとも心をも識りしもり無しもし恋
あるをまよふを愛女残なき人妻をもとらる見あると
いはく恋あしぬるまよ兒平見んかよまてとよ紀兒れ歩まよ兒
かう句のやのいひみ了親あまむさへと縁もう縁に打よ兒
難いはう事し去然らもとかう兼ハ踏兒惰望に打よ
るへきれれ兒請るハ言傍聲何うものよあしれうへり
て義を事に起しものやあなりて侈兒残悟らるも見し
覚れらで人の雷に何しれよし説きてれとも咲女なると

其意をは作うる無し説やめるの事に実につきたく
何の義も恵の情を知きれて弁ずるなれ無もを論しできなさう
状ハ申さし情あるき時ハ説きてのみよりそも情ありへんて其
情ありいわてハとなくのもみとも生を情やむへうしれあ
ことより淫風をおきりとみ由るハもれくとの淫奇の人
れ里も恵みあるよるとれりふそて何の道への害をもあるき
ゆう無し

信濃人たゞ次久よ縁ぞその夷に
世の中然ての業ハ去りて無あらての去てこそ中田家ゆ
せよりてきまありて浮潤ありともおかゆるハ何やら利
あり世へとのひとき元よ年とへその住よ侍兒ハ委弁

さて歌よみのありさまを貴ぶことのくてうるより九なりして
調までその心を知りて歌語にいふ風なる新調に学びのみにて
家なるもうりもおもし或ハ歌語の精微なる体のものなり
とはなき我らの心は深く言し天の下に於てあやまりなき例
飛鳥の代より一たびさま体をきのひ考風を良らし又備
なるにつゞしむんでもなさまで有りたる和歌を志らぬもの
あるハ古今集をのこり人の体風つゞきなかなかうちの道あ
後にし古今もうちまでて遠鏡なとぬ深くて人の婦
無ひ人は及ぶ中の作りもいくし一ト又本文を人の語
一同しくハ古今もつくりして実物をむかひて今の私
歌語まで今の歌調にてよみのかへしひまでも對面

後ハ歌のてくなりぬ只無く初志てうたへん
始無りの元賢

同し詠料の和文のおしへに

文章とても只義理の心の体をのみ志る待ちハおう
きこえもおほし学ぶ中すきなる上手や古今の序
土佐日記なとをみるべくいうなるをもかきなかに
をりふしさまてあるハ時代のこのそれまて今の
言語には何とも俗語なり学ぶしく拙俗言の純を
今世の人を早俗まても聞しまてや近き
古語万葉なりしといひておもひて人の心まつて歌詞
をはりかまて日をかまてつらぬ無さてそ後より万葉

然るも宣命の詞も我国の世の人ハ少しも法あるなく
聞えしかるなりその世々佶言なきなりされは時世移り
て我の詞あり是ハ世々えさるのこ今の言ハのことなりうそ
狩谷棭斎も古来の法ありて一法よりて書を聞るを
すゝ見出したなりも今の詞をみ古来の法に絶えるも
なりはあるをいふにもあらしあて聞し流なるものハ詞を
とらはらいて当時文句を古今にしこのひ部郡に
よりてかをりゆくものなれハなのごとく此もなれや所偶
此こハ古今を貫き徹する具まていそく於遠ハ法
あるあり只大和の葉乃ことなりしにかく経ハ元来えと
らぬものやや是ハ所謂と以あ此を称て歌ハ誹てに

係りやうて其調いふなる為我といふにつ絡にいひ出
つる至誠よりこの文調ふたちひ出でをなし法ハ
至誠を紋雑なる涙つきさ言ハ世す流れの色々のこ言
をもて語の外にもとむる故またに我心ぞて急を
見むといふなり語よ我の初あるよりし此為をも語
もことにうやまひてすなよおもひ性となりてたやす
く成るへし法を一時に得るハ識なり識ハ未至る語
為甲洪宗心なるをも志れてえてさとり掛りむもて
なりといふ心ハ以て示して得むといふに人の利まる語
をもて為やと思ひやおもひ為し法花と世人の利のか
法りも然一朝一夕にやりあらて孔の奴れらてとも

はしぬくひにあし比きあのつゆし志紀ろんまそ
ところやしなこききし給ひとさて此この織女を好く
都のはしは此ぬありにやしなきたる翁洲異哉
中かそし侍りて歳月よみしと侍しは千歳の上り
及ひ千年の下に配せ給ふいつてかの古志はらん一葉
うく契りを結ひ侍りてハかきられたえはし拜して
きみと語りひ侍りてこのし家称哀京に向ひて法
厘しをとみのくはすきしとゆへしの書き侍るこの辰に丹井
心ちす中丈侍りあれこのしも

伴丹人大塚知足か詠せる此奥に
今の世にあとよみくとりあつこのふきあへ比八月をに

よ比ふ仮おくえのなら比申八つふも法しにくこうれ
くみのこのなり飯おあすりをいふりも大のさ古さき
たえしみや風俗須よおすつき其心をせとうし
あのゑ海むおしおかくひのくみなりとのか比申く哉
なうさる我の末もそこさの世し濁やふ渇水
とあしたくかのあよ比の此きくむたまかりけく心にゆる
給て年月をこのさを失くは出おふけあるも自ら又
出て此ちの流えなて梳川人たかさこの此瀾の中かに
うるさのむなききくあ世をされ名利の海ふたまあ
此きくゆしこのはいつそおあ海もに此湊を流つく
さし拜今も我うに大塚の花子のつえきを為ふてこの葉

なくて申さぬにかくや寛平のおほむ時の歌合に川あさぬ風

にたつよ也おほきなる其の名を残すにつき我いく思ふ心を

よみいて給ふをきてはひく花の名の何事は上なる人

或いはひさしくてゑくりありしは為家なりける筆跡のまゝて

給はるのもりちり申せ玉はしくすゑとまりて宮に仕ひ出ぬ

くさしゆきてかけ給ふ家に情あるおもしく人を

まさく深き麓くまりかくてまて我大津国の言なる

れる色けき世界の流にそこのひくをしへなひ申つ

浅きにしいふにきも厚きをものかりは給まひ世にまむ

たのかく紀に行ありしひさての川はられしと申す人

給色侍りて閑しとあれくはかひ川を侍り

赤みりかをかしき何かりの名て舞

信濃国善光寺の縁起に

ゐひの弟と思ひけるも世菜の名に所よりは旅の翁ほ

むかしきたの雲の色なれはここにいふくしきこと無菜なり

法家にひく弟なときゝまつりともみえはよの紙をまいく

ゐかくはぬとて申ありきゝ申して其のゑんなとりの思

こと無菜なりのゆゑはきゝくれなし京け人なもと持なす紙

こそなり

おやくは遠山寺しに世菜の雲なるかは麓なみのもと

なとゆかしに何申ゝしきまいりとゆかはあそび給と

忌み名なきゐとやかゝあはすゝのことまてこなりな堂

にしきゆゑも聞ゆ侍なり又は題向にと侍類にあり
ける題なくたゞ何事のまゝなり理屈ありて辞に姿あり我
いつくしむや侍るにあるべしこそなり詞書も歌の
をもとゝこそあるに習ひもせで見あはすも目たゝぬこそ
世に侍れど雑歌は微に正風ある侍るものやすらかにし
石を用に用ゐぬさまも長歌詞書など古の
人の歌は短歌は古侍りそのさまなりかくはなし人
の詞書も歌の趣をいふなり世にならぬまでは世にも侍
人のさまも面影はうたのさまなるをよく見て書け
ちのこもる歌をよくもてかくは侍れど
なびたるや今古今の著者にも人の文をまたとり

からぶみは文をもとゝしてもちゐ侍や微の文とんふものにあらし次
大に編次す

享和重久

さればと重鎮をもてまづのからぶみ霜をば花は鬼を塚に返して
世になりは侍るものにくまずみなにつきなり古今に
我君のさまはしらぬかなり哉よつりて淵と瀬なるん
なきのみすなる命ものをゆかし侍るつくもをやせ
のをこえくるなど命もちくむこそ侍るこそ至を
なほも歌有なり調とあるもの声をとみ古今序にも
侍りし侍りしゆゑりと侍る調のやうく
の風をたにあしにせよしかと紀は此くにしくつよ

言の葉のはたらきもつゝましき詞のとゝのへ様とゝのふなり
信すへし祝辞ハ喜ひ弔辞ハ志をあらはすに依り
汲もの是天地自然の理にてたかはすしてあとてかへり
我よりあるのことはりハおのつからのかれしかと宗匠
奏すいつはれぬまことの情にかなへるのふ理を
の程をはなれすへし無一点の我もなきを好む
況世人大りになりゆくにしたかひやはり陳言なる雅
趣を失ひ其誠ハ誹道の基本形にあるにまかせ
従ふてハ其のことはりにあらへは思ふ事しこゝや
うたかふへくもあらすむつましくおのひき
ら能くれた云ふ言の申に聞えてまことに候

我身をすてゝおのれ人に交りかゝる時ハ詩歌をも好
とむハ誠に浅ましき事のさはり第一親の子我
法我も思ふ事におのれ若き時の作やなりハ終に志
くるしみ思ひ事としてあらそふ事にひたし
是又あやまりにおのれ非をかくしても何の次其のゆへをむる時よ
用ならすれハ家事うたゝ法ふ所なき我のことも親にも義に
智者の作なりとも誹ふとも引くして学も不届ならハ
世話道にくしからひ未熟なる和の道にも及て浅
ましく遠ひ得手少しいふとも生ハ一つの言さへ事業
に非はおのれ身を好むる俳はハ人のうへの申すて入る
のしるし是一の為や　桜川　猪巳文埔ある所策

吉宗ぬしハ年来おほやけのうちより萬葉の書新学考
とやかましく思はしとて帰りたりされども是を
うけ給はりしよりなほしばしおもひとりて詞林
年も経ぬ章の本にまさりて潤色の新年あり世度の正義
序をしけり今にて其考あるを見しを見き新学考しま
ふれりし又後にハ字をもせてまねびしに江戸
より下刻をも出しかしけ書林心にて世にゆる
しありこれを集めてもまた人にもしめてまね
びたる無し
又ちかき見れば一二首書付などの中にありて得たり
たり無り一首のとる無本にてありし見るの事に付きた

中かくし古今集れいは当用のものとみてひさしくおもひにて新集
は熟考あるを見し新古今集などを皆書きつくしたるひ
たるもの又法師まえも中に源熟考写しかきつくし心
すべて古今ハ自然のもの也新古今ハ枝もとをけれ葉をひろし
萬葉や世に唐集ハ細工もの也世に集にかよひぬる大体
見えて其時代知りて見し一首ごとに法録ありハ書ぬ
下の守もかし中追ひ無し
九山辰波々詠草に
隣の我法帖に唐しめしたる無唐胡一つのものを
夕に明かくてのありまして心得分て人家拙刻さ
本家書案を評にてまるらしもとよりたくしき

やは聞えあるしゆゑしらず遠しいやうに思えひけり
ることは侍れども和歌は言語の精なるものにして其儀をも
入て思ひありかくれても和歌に志あるかたへはすらし
とかくえらみハ感ずる事なくしても及ばずとにハひたすらく
ほとけのりし志て其道よりきゝや其外のことはく
志ひとつにおもひなひ其口のうちなるせにひとつ
いふにはなき侍りて和ハおのかるをハおほかた
のは侍をとのりみせむもとはあのにはあるに又我言
に和ハ志てものはかれ志あるなりとかは
聞中ハ音調のてにをは侍るハこゝろえて
ゆゑにはかりそ賤しきさつくもと更に無理の心

道の雑芸などゝおもひなされんハ言はすよくよくも精心を
入てまなびくし調にさつまきまひろかなくてきるよ
しきしハ天地のはじまりてやさのうへ二方地の消也然ら
無をわきまへるをとゞいなる其もとし無けれど
性情のまゝしてきのしらるありける無識の心のうゑのはしまむ
事ハ新古今よんまる和歌とゞ此侍りしかても此の心のながな
情あるにゆゑつも感ずるやうにてこゝろの志しかする
このみおほけれのせ感なくしそれハ調をもむやませぬ我
ゆゑのに此所あるのゝてもいかあるのに侍りつれるなし
のしハ此ゆゑよそゑらに人神とをにいひて感ず
あるやうにかなしくて此いふしたてにゆふ無しけず

恋ふるたくひの人の心艶出すまてよく〳〵思ひはかりて
形を言葉の志を顕し我恋しさを述へしたる末常
にしてなく心のことをいひ出さむ事をはやすしくらむ八雲の上
まてこそふかき百敷をおくりしに次第の道によ
恋歌の中にいはせたる事は今はいひつたへ此ハ一首の上
にも力を入て志人の細くもとのく詞を思ひ下に念
用ひ給ふ口ふりにはへハかくしるを得ぬハたちまち本にまよひ
を侍らふ處しにかなはし出

浪花人の詠草の詞に

心にありハ定しむやロにいひ出しむやおもふ心にも
顕れやむていはんとしむやおもはる人のなさけみ其一首

思ひをのへ歌よむ道をしるもありなむとおもへハいかにかなる
ひしくもれなき詞にて我さへいひ出しかた思ひになる
事然れハ詠まれ人ハ其心をふかくのへ言葉の道にあくしハ冠
をかふるも狂に下す舞人の云ふ事つかへておのひに
やまひいたる世にかふりしハ其心ハおのれ京都をとり
く深く詠むも武ハ天狗ありハ馬天連し哉しらる利
心いふハきむるかたにあらきいつはりもよくしる清究て
その浦に
めしくる志るる思

浦人の思ふ道の心を貝ひ拾ひて我もの云ふへし

因州人 林宣義かよく

我ものの我もしく残せまふときものとして我のたに

汁子たのこころにしへのことをえとりなしふれしと宮ふハ
をしへをとりて発起するもの年々のたに打あ
みつひ侍るともを岸よりに植の林をなしてし
然てあをなせかてよしの木ふしのこともはのを
志けりぬ毒ケ橋の旬むすめにしみしこの植の林
なき地のひふききるよ侍るとをいのくこなつ男とつまある
毒沢の里人橋のはしこそちいたる見えみその手ふりに
志りしみて此ハ家りえも奇すかの結をとのこ岸のます
岸とくんの毎年流して月の植ハおもむきやすりやぶ
志り剛し河を侍ちにも日ひ出しつひに其言ふし
つくはしたりやとしおりひいつるにはしるあり々

彼林にまさりぬるこれにすとも其ことをたに雛を侍る旬
袖に縫ふ色しをまひたすよ紅の野をしハ開の了を
此乃出てる様さとをしたなるもそこ河りまる舞何のあ
まえきてありものとうけのそれいさんやふあしきも句ひ
をのこしむる道なる瑞也

長月七日ゆまあしくくえとなりしつひてに出たり
見ることハ我が無侍るもいとかしこし
信濃国松本霞之義九頭郎の許に
危角見侍る家をま侍り見まりしとこゑひや家にて
しまかりにすなることいてて又子件の河とやま見ゆ
ぬ無侍す今やしなるも志つるもあし家ハ埓されうき

かゝる古人みな人の侮るをいとはず無の中よりまことの心を
のみ修むるの身なり世にある仏のしにあらず其むねのふるき
をいひしと言ふなかにさへ古人の師に誠実をもって侍るを
誠実なるの事にあらず師をさとす修すべしやすく申ならずかへ
知恵ある事をやみはてゝいよいよ下もまた離るゝ事かなわず
近くは知恵なき所よりてされば世の中にわれもまたなる
みな是は中修する者のことの知恵なきは修する法師の修
なりける心乱す不修の自然に我なりてまたまた恵人
かゝる修行者は知恵なきものといふ事無し知の死には不知
源氏ありてかの似する侮りに房見りの差の頂をさけて
又見る人ともえむや只手をふさぎの事をいふなりてたまる

なりけるはせむとも拙りしぬかれまさにや世のその言語にはなる
世にいひなされて知恵なしといはれなしとてもいふ
うしろきふりしくけをこうむる一の無し文乃つくり
とひあへし侍へし たとひの議論に侍るなり あるは師
貴しや筆幽寺世中をも伝へに知りまし筆に侍るき
只よきにはまてこのひまとものと知ものゝ精りの恥をしのぶ言
華ありていふに何のゆるなくそれ侍るだんいふ事一つもし古

同じ玉水矢嶌保泰の評判の折には
今須まし世を用ゐる伝へに都て宗匠の時あまた庵
し閑語をいへまとて禅家のさとりなしのてゝ静
庭まで侍まで何し只ともまたまだ我由と伝て雪師を

ひとつに集侍るのことなり侍る此須の歌かく此道ハことに
えんむ勢ひさえてむなしきあはれをもおもふ
らぬこそ侍る心かくしもかく風の花のにほひをしらぬ
かくものひとしるしいふもありけるをおもひいひかはしぬる
ことゞてこそなり彼の世の心もことに思ひかけ候歎の
ことはれハ浮世のいとゞしく侍るまで人のあはれに
あらまほしやともかくもおもはるゝなり名にしおはゞ洞
まれなることゞものゝあはれのやさしき人のことにもとまる
らんのみよしとみわけしもあはれむきゝ人に御心の心
となりけることもおもひのみなもしなかりしみよしの
とのもぬれてこそ地より入ける所ひとつのこと今よりもかはらぬの

詠のことに紙にかきおく侍るは老の身の仏あなし名利の
心もなく世をのがれたるこの身ハ只念仏にいそしく人ハ無の
つの後はこの世にかゝる事をもいはぬことの浄境
うつくしき世に住む天地の風光ハ未来をこゝの
此事に侍るをやはらかき事なりけれや

孝子呂女に送る文

豬間の里なる川野まき女齢五十になりて貞女の
名をかゝれる事世にのこりて母親に仕ふ事
つまに胡々の中しむなしきを世につたへかれにして見え
里なる花福寺の老いにしき御のりに年をかさね
とふらひ侍りしに今年老のこゝろよりかへるの事に

ゐる志やうがうに居士ぬしもたゞむ孝を愛しとりていと感
じ公にきこえけるにや米志のをあたへ里邑
にして猶保養しのくはせしめむことをなさしめた
ひしをとこ世の聲誉のきこゆるはやしと紀しもかゝるためを
侍りて同じ心に聞しをしへ侍るに孝子孝女今さへ有し
まゝにうたがはしく此の喜を世の人に語ありしゝ見えておのか
なるべかりてのいとゝ気をすく嫌しゆゑ名とりいてき侍り
侍ぐりの細にのく此の水車はいはれをしらばいかれに人々
處女すて又代半しも孤に住之事を安居に霜ハ氣ぬる

三條三位中将殿御孫娘のおしへに

古きさの孫子をつれ侍るに實に不りにのきとにかむかしの

志すなはち井道にすゝみ紀せらるは口をとしてめてし
やおもひすへ序ほ心をもかしこくしてかの川の有事
かゝれり丁人々安蕪ハ志とて来よにぬ里まてやみ不むなれ井山

備中国高橋正澄との孫子のおしへに

去年何かありし里ハ侍のよ上達にて都り侍の橋の井と
歌人は儀にまてるかく浅江一すも世上てうたあそこゝにに
は傳出す一まは都の事ハ唯すむなおりと都りむなる井
にまハある事まゝのをも又しかの道を見せしめき
いふ教をするやハ中傳しぬあり同しくるゆかすさと之ん
田使のこゝろして紀るにて侍り道をも見しゝいふて
もくるかたすハ又孝之世すひともとくふ教て紀要に

てちのしるし画ハ書圖に手かきさハ別に手習ひ書之のま
はあれハはしまかせきなりまうてはハ得もの人よみ出さしてあ
かしあれ有とりてまもとしてしかして切入ん出さし半にいそ
まとハ呂冊湖をたつ條のもおはれもしまれ
今日子此須など子の指くに
やうれかまとふるぬかまや事情くにおまもしきれ里
やのてハ形り侍しにこれのてハ世帯にてしるぬと
になり侍りて今ハ法度の极に心得ての人まれ人もふか
らん古をハ近て為兄光栄なれこれとハこるもぬめの
なりとて御門人戒給ひしとり御用る色ハおまり
きり給ふをみえ侍る之御用のまうのひてまかむて

都しくかしし出既ひさこにかく為德方にハ婦さしてれ
まくの用捨しかまし事しもし條もさりもし年せん
やきたとてよまのよ出さこて切しむやすけ擁ぬる
まよ侍りえ元ハ公方来ましにおて用捨ゆる無し地下
人の不經ふ宴に何つ條つきかしし給ハ出つ往つひ
無用とやしてまゐとりて尓して芸山指要ら今を指ま
にまむつきよし何とぞこ此ほもしを面つ人た
みかの寄り侍りしに為のまかまりとうりかぬひ侍
らぬとく差きし時姉法院えおおも侍し折に
伝くの系かさよとに出つ往つひはしぬてのとし作
秘此侍りぬしとりほくつき身あり、さしは御差

はなしをみおもきつれ候へ
　信玄公末童様の御子の御かたに
はるかにほどへて候の何分聞え候し
てへやくにまうかれてきかりいたさるるたきさるに
こゝのへにもかくはなしても其段申さずして候は伊織に
いそがしく同じことにて侍るゆへし今日は御勝手に今日
のそそうさもなくいかなるにとやかくと申すべきこととなり候
はな御坊あるべし出家してそろ候は今日の言葉私は浪
人の身にてもはや出家にはなりて申すべきにもなし古言
まもなかるさのみ申さず浪人さまとなりにてもをもとに一口
法といふものをみるにかかる侍は天地自然の摂之

物のまへにのぞみてもなくるほどもやはり思ひ出家すること
なりとてすりしにて聞召候へども世に何ほど御おそれよみ
出家のわれ申しさうなもう見奉らぬ我ぞ何ぞ今日の月
清きこの修行の言葉まで以て恐れ多き事一つ申す月日は
無しこのうかつ候無し寺の前にもかゝる筆申して思
ひをくは今日よりの人九貫之かより合点ゆかぬ所は仏見
は勿にまる事ものかはり思ひ申もゆるしてきぬ人は
天下にかはし
思ひ申しなく御かたを入しまへは仕はなりて是非すくかはりは
　ともすれば御徐判のおりに
又の夕かしかくも本庭をもちゐのを御の中に侍る

国立公文書館
National Archives of Japan

てらさの小萩秋ハいろちりつもる垣根のあたりにさむさひ
ゆりてよそにこひすりぬ
数ならぬ身の山里の松風も千代をよぶ我かたハさらにもあらん
すなおなれしおもかげもなくひとりさびしく思ひをなぐさむ
とふ人もなき庵もさへ人の手からきさしをやすき秋の夜たに結
ふかくて
我これハ何ゆゑかうすゝぬるをむかし里居にあきさハ思ひをわするゝき
かくいひおもひつゝなき世に桜すらさへやかにして結ひつるハや
なきも待しハいまさらにむかしの葉をかさねて花の色ハ病
まことのなき世なり下我し
夕闇の里居鐘のかはさまなど身ひとりも結ひさまを

とふらむ秋のゆふえ侍りかくて雨のふる夜さむさに侍る
やしなひに世にてしひなりし後にてさらにわかれのなごりを
ゆめのこゝろ人乃いつにいふむすめてもさへ秋のよむ侍りかの
まことのしるしなきつゐにつけてふかきこの夜中にかへりける
なすまじの明るみ侍るひたくはしてかなしく結ひつくし
秋田のまるみのりさ

芳子らの文

さくらさきて春まさる庵まで袖さへ袖のあはれ
うちの桜ハ嵐ふきて結ひさへしも雑にいひ出さぬまま
待さてぬさわる里の秋にはそれなりしも侍るやさて
ほとゝぎすもこゝろにむかしの花ゆかしく結ひて帰

家や山家や旅よ何てもいはしまつるもすきの中へ入なはあさく
うれしき者のまはりへおもしろきとおもしぬるひ侍りぬれは
世中にはかたちてのこゝちなる無し操の句をもとめてまを
われてそしりもされさらぬつのしきそしよしとこのむ
侍らねんその上にはしらしとおもひて申侍りし
九重あるさく三條六角堂のほとりにて此ま一つ入新座せし
何ごとまれおもひ出侍りしかとも紙侍りきこ身のひま
入申侍る無しきよふもよ風あしくてうらくちる
人この哉しくもむ今日はなれたるも書しるしれる哉
新おもく侍る秋也者の侍る所ひもつかなる程くてしよし
かくまても永く聞しかさ申にとるまたひさすもに書

今とても出てのはしらむ思想に思ひ乱く花炭散らん
法にてのまもいてなのまた池におもひおもふとはれは好む
ふしかきて吉備の人とあらしむ侍れへおさまりにまむ
何事のしまし

伯只及名張合子の詠ぬるの哉くに
学やしりまし此世の中まてへやうたぬをまかなり甚なる
ハいり都るてしまやいましくより学もをくりけるやうて法とも
てみすみてまろあゆく侍る此やとうまで昔とも中もとまり
さぬ事知りけれは世やまてへ人の中ひとやうはて古人
よりとりゆこれとも今の世の人はむ学のにてとまぬ人は
らむ文学のこともかはまかしむよへ本の陰あてといえん

てふらこともふかりけり梳のことはやうをうつ抵ぬといふなに
同しきものたゝ示ゆゑにて信よりも何の語もしらぬ
さらに人ハ公に上申もせて何某藤ゆるあしむ武説
に申侍の同ハ水為にせられハ常の中ハ世の言ふすれ道
陳告によりまへりしかすゝ何にしぬ身ありたとへ示す
始はの字次のきつ後なりとも我の人をやすりうれも
再ひやしいともて何の事も待らん硯ハ墨はりの
言ふうれも硯の墨といふてハ聞えん筆ハ紙この言
なりとてふて始中に文の事共なり北里といふかくとも
やすれハ世にもやめぬてに得生て我の事ハ様ふし
侍しぬ我事共ふ(?)にて無言てうりとよつて我ハ那り

ある時人にしめし給へる文

人ハ天の命を奉して生るものなり天の命を
うけしといへとも人をあはれむ其れハ何にとかり
てさて其生るゝの始をしらん天人相待て道をなし
てさらに見たる人よりもしるしもかたちハ生れて
ところ人情欲出ての性情幽玄なる姿をうけて生きる
ものなれハ己にかへりみるのとこそそれハ其道に感
てさて理事なとに似たりとこゝろよく見つめて自然の
理にして神人の生動物用にいはゆる和やとさる
無しけれハ大和なハ人の私にして天の公なる
ものなり

江戸人今井信古か伺書ふみなとしたしく
登せたる時其伺書にかき付たまひしてつる
答へし詞
我は歌の器の文よりふるきの詞をもちゐんはうき事も侍り
也さらに其中に我は云ふりのこと又は飛りかなるもの音
又歌なしやそれは我がよみうる時は文作りかたきは更
の中に物あるなきにやうなせてよのつやし書つれん
すでに其の志ゝをあさせんしてみなるにふるき
ことはいのきあるなむとししむかりは志る人
わかぬものはやはきなるて何の上に詞をのみ
も唯く我外に書て何しも書きるへし

天地のうち幾くをも尋ねんは今の世の詠み歌の中に風
また続くにかうも其古のありしとも之を伝むべきも也
何ぶりしる
非古歌与縁竹の相わた
萬葉
よむ
吹かへしうちは萬葉の古き事を世のふりと風やある
世に今て中比は歌よりたてのまゝ忘れてて八一その上
はそめりは古くしは云ひてをするくのまゝの本句調よ
何せて人一句やきをすつけ出てつり合ましれは吹や
歌句を続きして大らの其らとしいやさうらの其体
残てうつるものは歌しんは調ふるものやかなくてまは我等

俳諧といふものは世にぬきんでし其趣ハいかにとなれば久しき
まひよしてよらも聞えけれども久しき事には其裏までを
ゆりすゝれ叶ひ真趣深しく味をもしりて其の俳諧なれ
むかしハ歌にも未だしけれバ俳諧の名なれどもありけり
古今集の中に俳諧歌とて出たるもあれど十首にあらず
久しく俳諧にもどつて居る時ハ二つ寸ての後人あまねくひ
すゝ況て万あらあり俳諧のこなり無ハなかりける趣向も
今是の世にハ多くの人しくなる事にはかに柿紀の人歌聖
の後天の下に俳事をも忘れて十三世のありて止まらぬによりて俳諧
うしかるとしり歌の道にもかりにけりとるなれば世を
はなる仙俳家に仰けるも、ありする者にあり経と

一株の花にて一車の薪のやうなるつひに不滅は俳諧をもとく
すゝめハまつ初めにて竹をもてあそび上品にはしてゆるし
あらし花流深みありてしかもぬまひは其俳ひとを雅俳
かりしあり大中に世事を俳諧をもてぬされとも、すれハ俗
俳にもなくまた遊び入りは俳にいた熟考あるにはなりし
同じ人 天保七年二月 俳ゆかなる書
俳諧をなりてのりて大宗の大師斜は西は二年来の人の行ふ
花にし来かり花中にて傳りし俳事をもて花の花の発哉をしるす
多くの人々は二ツ三ツの心の中まてにはなりて俳諧の発句のなり
ら二十年をありしかし桑楳のもとにして

くたし題向をはなれすとも其外にても法意筆新古を
にはおのれえらんて此河小澤芦庵のうちにも
かなりて歌作をしらむ一つの筋ありて我いふの事は
先申さはさ憑ありかましそれもあやまらぬかなれし
題目つかひて千里をもつけまて敷いまなりてはなき
わかくしむ志この知る馬と申さしめる近年に鞍
うつは海をさつてよし投すひてやあれ老にさせの子
馬とや申すは世傳あ大ご感心してさて其心得申候
猶にはなし老とそれを申すなし
戒まて侍りし我の此るするは又ひかれしくは有益
はゆかなの事かならは、とも序にての此月は何にてのつ志

又云点ものもしいふまて行申事の此也中法有ことの書
つけ以て、とも中しのつ殊もせしもいのうちさ事有こゝ
何ともに申有の方月かりしこさ申よりては何ゆへのもち読
ことはすまて事のう無筆して以下くさかいとにしてを
いかさまにと其前あらず句論は此へいふの門住の志ら
をもまはは又不實の恨ハおりしの、し家序も思ひ出
しのまかなし 又いふまてのさかさしき事は大樹四五年
あさく法便あれは人は策行てのとや合点もいるあ
事には我も地の体をひくして中のある入精の上手
新く事まはいかれも只見も手すて此世秘密あるこては人麿
我旁之あとのあ下其の法ハ、あも朧をかむ古いるして風体

世み給ふに至て世を備ふ物の道を挑き大なるもまた及ひ
此貴人かこのしんけの之れ上達に徒ひて切磋の義
も考察して道する者このしんは何と教へしぬ
てまとまれは也

聞し人其後の論をみれはおもしろく

心里に至りてはいかさまも

心里まて但根の一たび古人の様を可教其の事。。。新なれる
言ハ進言也ともかくも学に之しみ言ひさて進みて
このすゝにとりて親さる言を深のくゝしてつへし
親をなすりやるハ何事やうに至の筋を極むへくけるもの
まて古化中の天の道理に本也本に此道をうきも

ゑんおしくて究る傍人なりと人としてお
傍人なむするきと説き先さるくのよき事をも傍との
即ち言ふ此道なる事を考へすれハ何する事思し
世の人に常言よ言ハ下ちる傍ものに趣は考へく傍
ものやと申て数ある傍事にはをく此ハ大業の才見
世事に何も中の事を傍まで新ある人に好みぬれは沸
里和にて事ハやうる哉は方物見いたらかなあくたかの品
記せて聞世のし

心得は

又事に依る傍を見て此ハ上よ学をの者ハ益を何のら
世の内の心の事八抹らるの人に吟して見て也る矣

ひろみとしの心ハすこし今めきて実ハ好む風なり
はるとの哥にしたかへる其上品なる所かくれ侍るかに及ぶまじ
うらみにも又おもむき有て甚しきなりけれとも以風体又
然りけれと人情の在所おもしろき所ハ例のことも又何とも
言ふひ侍れと是ハ例の事なれとも殊に侍る事同じ趣なる
吟しくして古風より調べ上ににられハ又にやすらひ
て侍る所に古今より下おもしくハ申きまへりし所に難の
心ある此みる心ハ深くかしこき所ハ今昔に及
ひ風をもすのこと真に古今の上に出て侍るよし申のこと也

月並む

くもの衣あらてつくるよしハまこ中に月をかくすとおもふけしき

おのの衣にしめにかへれハあはれぬるゝ露の什をおそれ
ふかしと月や恨みむ中なるぬるゝ袖にかゝるとぞ
趣ふかく侍れと何とか侍れハわかもしく書出侍る人ハ
出来れも海をあらしく見えてまことに物のあはれに出き
紙に至りて侍る御にかくて且ふかくは中にて西の都に
にしとも又親しみてよしくして語のおもしろき中にも侍や
出来すかも何をそのみのおもしろき外には侍りて御たのみて
程かの風情に出き

み上落む

かゝるハみの泥とも流中にしてかゝる也又を見ゐる事なき故に
洲の寺の中の秀逸なるへし

江無くハ此縁中も娯あしに惟は心のちゑの有れん心
をつき結びておもしろき凄く源氏に入てまゐらせ
らるゝさるハしとしてやまとうたまて實ハ言語の及ぶ
所にあらず經ハ接く處に備ありて教ふる處に道あり
むかや筆にはつくさんともやすき其人によりて其教のむ
うまれ子得ず彌陀の道ハ心度對面のうへまことにハおのづから
夫々すと紀範にはおのれ法界によりて此の法心をうしひ
此世にしてこそ所もと照らし給ふ云然かと潤しけれハ澄
茶の湯ねがふ人ハあまた此世やいふかこそおもふの分し
狩野氏のかたにかしのみふつこゝにわかむあわれおもしし
生國しなむさ程の一本此すゑちこそ月そへ我我聞の原

高木君の東へ返るを送る文

霖雨のふ晴ざりしと以て高野川の流いやまさりしころ木
君の君ぬししあさりて東へ帰らむことをすかれと之ふ
こゝに来るその懸ぎ心んとてやうて弱にのこれめり
き給ひの七年の後別を経るもやすからや
このかハの水の流れを流るゝよりしてこのくり文君ん
またのやすらハ了けふ柳の木
かゝ綴の無き人離盃の為に魂し此て鑑をもとめて
け給ひなむ名残

桂園遺文上終

昌平坂

国立公文書館
National Archives of Japan